

対しての軍紀は厳しく、万一、不法をする場合は、軍法会議にかけるなど嚴重に処罰された。こんなことから帰るときには涙を流して、またせひ来てくれと言って分かれた人たちが多かったです。

また、思い出すことは、昭和二十一年正月ごろ、中国国境を通過して入ってきた支那派遣軍の人たちの姿だったです。私はビンエン病院の歩哨に立っていたとき、広い舗装道路、ハノイへ行く道だが、そこを軍服はポロポロ、口を開けた靴、支那靴、草鞋履き、あわれな姿だった。これからタイまで行くのだろうと思った。同じ日本軍として大変だ、可哀想だと身にしみて気の毒に思った。私たちは、昭和二十一年四月二十八日浦賀港へ上陸し復員したのです。

バターン死の行進

滋賀県

川並藤一
伴 八三

第十六師団（垣兵団）を語る場合、垣兵団はレイテ島で玉碎しているので当時のレイテ戦を語る者はいない。わずかにサマール島に配備された者のうち一握りの兵隊が生き残っているに過ぎない。レイテ戦の模様、サマール島の戦況については垣兵団生残りの戦友たちが編集した「吾等かく戦えり」（垣兵団）に掲載されている。私はレイテ戦までに復員したので現在もお生命を保っているが、もし私がレイテ戦に参加していたら死んでいないはずである。命を持って帰ったことだけでも有難いと思っている。

私は昭和十七年三月一日第一補充兵として第二回目の召集を受け、敦賀歩兵第九連隊に入隊（第一回目の召集は昭和十二年九月一日京都伏見の連隊に入隊し支那事变

に勤務)、即日軍装を整えて出発し、三月十一日にはフィリピンのリングエン湾に上陸した。つまり第一次バタールン攻略に失敗して兵団が壊滅的な打撃を受けた直後に、その補充として私たちが戦場に到着したいというわけである。第一大隊第一中隊第四分隊に配属された。

召集令状を受け取って一〇日後には戦地にいた。

(以上 川並 藤一)

みんなタテ壕を掘って壕の中に身を遮蔽して前進することも後退することもできずにいた。そこへ補充部隊の到着である。支那事変の体験者ばかりの歴戦の部下を迎えた中隊長(准尉殿が中隊長代理をしていた)は、我々の顔を見て言った。「ああ、今夜からゆっくり寝られる」と涙を流さんばかりに我々の戦場到着を喜んでくれた。それから第二次バタールン攻略戦の準備にとりかかったわけであるが、それらはあとで分かったことであって、その時はこれが第一次バタールン、これが第二次バタールン攻略戦というようなことは、一兵卒(当時上等兵)に過ぎない私には何も分からなかった。ただ命令のままに動いているだけであった。

ルソン島の西海岸からマニラを経由して東海岸に移動したのであるが、それが第二次バタールン攻略戦であったことも、後で知ったことであって兵隊には何も分からなかった。

ただ昼間の移動は敵の目標になるし、我が方の企図を秘匿する意味からも、行動はすべて夜間であった。我々が所屬する第一大隊第一中隊第四分隊(擲弾筒分隊)も例によって夜間行軍を続けていたが、どうも部隊の動きがあわただしい。今来た方向と逆の方向に駆け抜けて行く部隊もあつたりして、なんとなく普段と違う空気がただよっていた。

夜間の真暗闇の中の行動なので、兵は背のうの飯盒に白い布を付けてその白い布をたよりに闇の中を行軍していた。どこでどういう具合になったのかよくわからなかったが、第四分隊だけ小隊の主力を見失って、はぐれてしまった(後で分かったことであるが、これが第二次バタールン半島総攻撃の日であったのである)。当時は兵はそんなことは知らなかった。小隊主力は右へ進んでいた。気が付いたら第四分隊だけが取り残されていた。あ

たりに味方らしい部隊の影もなく、むやみやたらに動いても仕方がないという分隊長の判断で、とにかくそのあたりに寝ることになった。(これもあとで分かったことであるが、街道を道路沿いに歩いていた小隊主力が急に進路を変えて右の方向の山に突っ込んでいたのである。

これが第二次バターンの総攻撃だったのである)。つまり夜襲をもって敵陣に突っ込んだ部隊の主力にはぐれて部隊主力とは別の処で一夜明かしたことになるわけである。

夜が明けてみると、前方の山から白旗をかかげたアメリカ兵がゾロゾロと出てくるではないか。第四分隊、こちらは総勢一三人、敵のアメリカ兵は何千、何百と雲霞のように山から下りてくる。まずこの光景を見て我々のように山から下りてくる。まずこの光景を見て我々は腰を抜かささんばかりに驚いた。武装解除されているので武器は所持していなかったが、キャラメルやタバコをくれたり、チョコレートをくれたり、我々のご機嫌をとってくる。降伏したアメリカ兵の行列が続く中で、約三〇〇人くらいのもので行列を区切って日本兵が一人付くことにしたが、前記のとおり日本兵は一三人である。そ

の一三人が降伏した敵の兵隊を引率するのである。

とにかく後方へ送ろうということで、大隊本部へ送り届けることになった。大隊本部がどこにあるのか、それも分からない。とにかくもと来た道を後方に下がるだけである。一人の日本兵が三〇〇人近いアメリカ兵を引率しているのである。後ろからブスツとやられたらそれきりである。気味の悪いこと、この上なしである。もしこれが日本兵とアメリカ兵と立場が逆になっていたら、一三人くらいの敵ならアツというまに殺していたであろう。部隊主力に昨夜闇の中ではぐれたばかりに奇妙なことになってしまった。自分たちも昨晩から何も食べていない。まして何千、何百人という降伏兵に食糧などあろうはずがなかった。

やつのことで大隊本部を探し当てて降伏兵を送り届けた時は思わずホッと安堵の吐息をもらした。大隊本部はこの降伏兵の大軍を見て泡を食った。処置に窮していた。ここから先は私の想像であるが、大隊本部は連隊本部へ連隊本部は旅団司令部へ、旅団司令部は師団司令部へ、旅団司令部は軍司令官へ送り届けるよりほかはない。

この間三日はかかる。炎天下の中を飲まず食わずで三日間歩かされたことであろう。死者も病人もでたであろう。降伏兵たちを運ぶトラックもない。これが世に言う「バターン半島死の行進」である。軍司令官(第十四軍)木間中将はこの責任をとらされて処刑される破目になったが、当時は夢にもそのようなことは考えられなかった。

それよりも全く戦意をなくしたアメリカ兵の大軍を見て、こんな奴と戦争をしていたのか、遠く故郷を離れ、両親や肉親とも離別して命がけの戦争をしていることがむなししいものを感じられてならなかった。ただ一つ言えることは、第二次バターン攻略戦において、敵兵の降伏したアメリカ兵の大軍をまず最初に受け取ったのは歩兵第九連隊第一大隊第一小隊第四分隊(擲弾筒分隊)の一人であったことを知るものは少ない。そしてバターンの敵陣地は第一線、第二線、第三線と三段構えになっていて、第一線は比島兵であった。顧みて思うことは、降伏したのがほとんどアメリカ兵であったところから推察すると、第二線ないし、第三線陣地の敵兵が降伏したことになる。逆の見方をするならば、日本軍は敵の陣地の

相当奥深くに侵入していたことになるのである。

ちなみに敵の最高指揮官はウエンライト少将であった。

上海戦は輜重 満州は山砲隊

愛媛県 相原良光

私は大正二年生まれで、召集は平井さんと一緒だが、昭和八年徴集兵で甲種合格、その年の十二月に普通寺の輜重第十一連隊へ入営したのですが、輜重兵だったので、三か月勤務して除隊です。

支那事変が勃発したため、昭和十二年八月二十二日と記憶するが山砲十一連隊に充員召集され、段列編入されて二十四日動員完結、徒歩で詫間(馬を連れて)へ、二十六日出帆して上海の呉淞へ、八月三十一日貴腰瀉へ敵前上陸し、九月一から十五日間は羅店鎮の攻撃です。

敵は丘に陣地を構えて、上から激しく射撃するので各隊は苦戦しました。台湾の重藤部隊は敵にやられて後退して来て、我々山砲の後へ着いてしまった。朝起きて見